

「表現運動・ダンス」指導時の「即興表現」に関する研究 — 舞踊家のクリエイション・スキルを切り口として —

寺山由美

Study on “improvisatorial expression” of the dance classes — Focus on the creation skill of the dancers —

TERAYAMA Yumi

【目的】

「即興表現」が学習指導要領に位置づけられたのは、平成元年の学習指導要領改訂においてである。毎時間「踊る」楽しさをベースにしなが、簡単な作品の創作への展開により、「踊る」「創る」「見る」活動すべてを含んだ楽しいダンス学習を実現することに重きを置いている。そこで本研究では、まず、舞踊家の即興表現におけるクリエイション・スキルの要素を明らかにし、その要素をもとに熟練指導者の授業を分析することにより、「表現運動・ダンス」指導時の「即興表現」について検討するものである。

多くの（舞踊専門でない）体育教師は、「表現運動・ダンス」は学習者にとって意義あるものだと理解していても、指導できないと考えている。「表現運動・ダンス」の指導法それぞれの特性を明確にすることで、さらに「表現運動・ダンス」授業を改善する指針を得ることが可能となり、さらには体育指導者それぞれが自分にあった指導法を知り、より内容の充実した授業が展開することが可能になるためのデータを提示できると考える。

【方法】

本研究は、以下の2つの研究により明らかにされる。

- 1) 現代舞踊家を対象とした「即興－作品創作」に関する実験
対象者：2名

*詳細については紙面の都合上割愛する。

- 2) 「表現運動・ダンス」指導者を対象とした調査研究について

対象者：「表現運動・ダンス」指導の熟練教員（小学校教員2名、中学校教員2名）

- ①日本の「表現・創作ダンス」学習の指導理念および指導法について、文献研究を行う。
- ②対象となる指導者の授業観察および面接調査を行う。

即興表現の展開における指導観と指導スキルを検討するために、「表現運動・ダンス」の指導で高く評価されている教員4名の授業観察と質問紙および面接（インタビュー）調査を行う。

【結果と考察】

- 1) 舞踊家のクリエイション・スキルの明確化
現代舞踊家を対象とした研究により、クリエイション・スキルとは、「身体イメージ能力」と「表現的動きの創出能力」を持ち合わせていることであるということが明らかになった。詳細は、下記の論文に掲載した。

細川江利子・寺山由美・羽岡桂子（2008）「舞踊におけるクリエイション・スキルに関する研究－現代舞踊家による即興表現から作品創作への展開を事例として－」（社）日本女子体育連盟学術研究 24 : 41-54.

- 2) 熟練指導者の授業からみる「即興表現」の位置づけ
熟練指導者たちは、「表現運動・ダンス指導」

において「即興表現」を重要に扱っていた。「即興表現」は、すぐに感じ得たものを身体表現にできることが利点であり、身につけさせたい点であると共通に述べている。また、踊る楽しさを味わうことができるという見解も共通であった。

しかし、「即興表現」から「作品創作」への考えは、教員間で違いが見られた。「作品創作」は非常に大事であるとする教員は、作品創作こそがダンス学習の最終地点であると考えている。一方、「作品創作」は単元内でできなければそれでもよいとする教員は、身体を思いのままに動かせるようになることが大事であり、「作品創作」の課程で身体運動の追い込みを減速させるならば、「即興表現」を重点的に行うべきだとしている。舞踊家のクリエーション・スキルで考えると、前者は「表現的動きの創出能力」に、後者は「身体イメージ能力」により着目していることが明らかになった。限られた授業時間内で二つの能力を効果的にあげる指導方法の検討が今後の課題といえる。

また、「即興表現」を促す課題の捉え方には、

それぞれの指導観に違いがみられた。課題には、運動によるものとイメージによるものに大別できる。動きを具体的に示す課題を推奨する教員は、学習者に対して押さえない技能を明確に示すことができるとしている。一方、動きを具体的に示さず、イメージの課題を推奨する教員は、学習者から創出される様々な動きを大切にするため教員からは動きを提示せず、学習者が次々とイメージを動きに変えるスピードを緩めないよう努めていることが明らかとなった。

【まとめ】

熟練教員による「即興表現」の授業では、舞踊家のクリエーション・スキルにみられる要素が組み込まれているが、その指導観によって重点を置いているところに違いがあることがわかった。つまり、単元終了後に学習者がどのように変化して欲しいかというビジョンに違いがあるといえる。「表現運動・ダンス」の授業は、学習者のみならず指導者の個性も生かすことのできる領域でありことを踏まえ、今後対象者を増やしてさらに検討を深めたい。

〈表1 熟練指導者のプロフィールと回答（抜粋）〉

	A	B	C	D
所属	小学校	小学校	中学校	中学校
教員歴	29年	38年	15年	25年
「表現運動・ダンス」指導歴	24年	32年	15年	25年
その理由	仕方なく取り組んだ表現運動は子どもを変えられることができる。他領域にはない魅力をもっている。いつしかのめり込むことになる。学生時代表現の経験はなく、ダンスに苦手意識をもった。いつもさぼっていた。教員になり、やはり表現はさけていたが、学校で表現の研究に取り組むことになった。	県女子体育連盟の講習会に誘われて	大学で舞踊教育の勉強を始めた。高校からダンス部。	大学で舞踊を専攻していた
指導方法	イメージカルタ	課題学習・イメージカルタ	イメージカルタ・その他	課題学習
指導方法の魅力	体育の先生でなくても、気軽に表現に取り組むことができる。イメージから動きへつなぐことが簡単にできる。	イメージからは題が(作品名)が浮かびやすくデッサンしやすい。運動は動きが大きくできるし、とりあえず動ける。	体を精一杯使った自由な表現が個々に現れるところ	短い時間で、初心者でもダンス・表現の世界と出逢わせることができる。応用すると長いスパンで学習に取り入れられる。
単元計画	スパイラル型	スパイラル型	スパイラル型	ステージ型
即興表現を取り入れているか	とてもする	とてもする	とてもする	とてもする
学習者にとって即興表現の魅力とは	一人一人のおもしろいユニークな動きや、その子にしかない個性を発揮することができる。気軽に楽しめる。	1時間完結の授業なので、咄嗟に創れるのがよい。時間を与えると切りがないので。	今持っている力で踊り・創ることを十分楽しめる	手がかりを与えられれば、見られることを気にせず、すぐに動ける。
即興を通して学習者に身につけさせたいこと	イメージをすぐ動きに変えることができる力。自分の体を自由に動かすことができる力。	デッサン力	自由に踊り創ることの楽しさ	気軽に表現できる力。ダンスの表現力(ジャンプや走るや拡大縮小やストップなど)。
即興表現からどのように授業を展開させているか	即興を生かしたミニ作品作りへ発展させていく。	グループ創作の時間を設けて簡単な作品にまとめる	(単元の時間がとれないことが多い)即興表現のみで終わることが多い。時間があるときは作品創作をする。即興のまとめとして1曲を踊るという体験をさせる。	動きを交流しあって短くグループの作品にする。
即興から作品へつなげる際の難しい点	固まって話し合ってしまう。同じ動きになってしまう(そろえてしまう)。長いお話を作ってしまう。このようなことから、即興でみせたその子にしかできない動きが見られなくなってしまう。合わせようとするがあまり友だちの動きを目で追ってしまう。	作品を持ち寄ってグループでいろいろなことを決めるのに時間がかかる。		作品に求める点を、即興的な表現から大きくバージョンアップし過ぎなければ難しいことはない。
即興から作品へつなげる際のポイント	作品を作ろうと投げかけてしまうと頭で考えてしまうので、二人組から四人組のように活動形態を工夫して、教師が狙っていることに迫らせていく。	だらだらと時間を与えない。デフォルメしたいところを中心に動かさせさせる。		即興の時に大事にした今日の課題のポイントを失わないよう、その時生まれた動きをつなげたり、少し膨らませる程度にすること。
作品創作は必要だと思うか	どちらでもない	作品創作は必要	どちらでもない	作品創作は必要
その理由	小学校の場合、即興中心の学習が子どもの実態に合っていると考える。しかし、即興だけで終わってしまうと学習としての深まりがないように思う。即興を生かした作品づくりまで経験させたい。しかし、多くの先生方は、作品づくりにとらわれすぎているように思う。“即興を生かした作品づくり”の私の思っている意図は伝わりにくい。	人と関わり合う力を育てるには多少時間がかかっても話し合っ創りあげることが大切	作品という言葉の意味によるが作品創作の前に踊る行為を対セルにしたい。	自分の思いを表したり、自分の動きを見つけることはダンスにとって大事な要素だと思うので。